

---

# 春は出会いと別れの日

神田白兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春は出会いと別れの日

### 【Nコード】

N2339J

### 【作者名】

神田白兎

### 【あらすじ】

「ちわー。メイドいかがですかー？」

両親と死に別れて、自暴自棄になってひきこもっていた俺を、悲しみの底から引きずり出したのは、宿なし借金持ちメイド志願の女、はるひ春日あずま。

馬鹿で、破天荒で、お人好しで、まっすぐで、気高い彼女と俺の、どうしようもなく大切な日常。

メイドはいかがですか？

「柳！ お前ん家のメイドさん、見せて！」

クラスの友達<sup>アホ</sup>の要求に、思わず頭突きで割らんばかりの勢いをつけて、机に突っ伏した。

新学期早々、こいつは何を言ってるんだ？ 春の陽気で、かろうじてかすかにあった脳みそが、ついに全部溶けたのか？

「……あんた、バカじゃないの？ 確かに暮柳<sup>くわなな</sup>の家は、メイドさんがいてもおかしくないくらい、バカでかくて金持ちだけど」

「お前、二次元にはまりすぎ。現実の日本にメイドさんなんている訳ねーだろうが。せいぜい、おばさんのハウスキーパーだっつーの」  
他のクラスメイトはアホの戯言だと思って、痛い人を見る目、もしくは憐れみの視線をアホにやって言う。

俺はとにかく無言。黙秘権を貫いて、事がこれで終わることを祈る  
「ちよっ！ やめろよ！ その痛車とかを見るような眼で、俺を見るのやめて！ 視線で……うん。生きろ」って語らないで、慰めないで、憐れまないでくれよ！！

マジだよ！ マジで、若くて綺麗なメイド服を着たメイドさんが、柳の家にいるらしいんだよー！」

「……お前の妄想を他人<sup>おれ</sup>ん家に押し付けるな」

何で俺、こいつと友達なんだろう？ 多分、これは俺の生涯七不思議の一つになるな。

まだ何かをわめいてるアホは放置しておいて、俺は鞆の中身を机に入れるのを続行する。

……あ、しまった。弁当、忘れてきた。

「なあ、悪いけど昼飯代を貸してくれ。弁当、忘れてきた」

「ん？ 財布はどうしたんだよ？ ……って、そーいや柳って何か用がある時以外、学校に財布持ってこないよな。別に全然構わないけど、メイドさん」

アホはくねつと、乙女ポーズでおねだりした。俺の精神に会心の一撃。

「……だから、そんなもんはいねえって……」

「おい、暮柳！ 家の……人？ が、忘れ物を届けに来てくれたぞ」

クラスメイトがすさまじく微妙なニュアンスと顔で、喜ぶべき報告をしてくれた時、俺の時は止まった。

きつとそのクラスメイトはスタンド保持者だ。スター白銀さんがいました。きつと多分。むしろ、いつそいてくれ。

「お、良かった……な……」

アホは真正正銘のアホみたいに、口をあんどぐり開けた。

そしてこいつを、憐れみや痛い人を見る目で見ていた連中も、まったく同じ反応をして、俺の弁当を持ってきた『家の人』を見る。

喪服のような真つ黒で丈の長いワンピースに、清潔な白いエプロン。トドメと言わんばかりに、黒いショートヘアの上には白いヘッドドレスが乗っかっている。

完全無欠にメイド。

言い訳不可能なくらいメイド。

「坊ちゃ〜ん！」

出張メイド喫茶みたいな女は、俺の弁当を持って、俺の方を見て俺に手を振って言う。

「本当、低血圧つすよねー。朝は全然、脳に血液が巡ってないっつか、ボケ倒しと言うか。

せつかく、今日の弁当は坊ちゃんかすがの好物のだし巻き玉子とからあげが……？ 春日坊ちゃん？ どうかしました？ 何で無言で、震えてるんすか？」

本気で空気が読めていないのか、わざと言ってるのかは知らんが、とりあえず俺は、キレることにした。

「……あずまあー！ その格好で出歩くなって何千回言わす気だ、てめえ！ あと、その呼び方もやめんかあつ？」

俺の名は、春日<sup>かすが</sup>。姓は、暮柳<sup>くれやなぎ</sup>。

歳は、早生まれなので十七歳。高校二年生。

家は、自慢に聞こえると思うが、頭に大をつけていいレベルの金持ち。

両親は去年のちょうど今頃、交通事故で亡くし、独りになった。

……けど、本当に一人っきりの期間は、たったの一週間だけだったりする。

『ちわー。メイドいかがですかー？』

ふさぎこんで鬱まっしぐらに自閉していた俺を、石化させた人物。  
春日<sup>はるひ</sup>あずま。

そいつは、そう名乗った。

『どっちが姓だか名前だか、わかんないっすよねー』と、ノー天気  
に笑いながら。

人の家にいきなりセールスマンかのようにやってきて、意味のわからん事を言い出して馴れ馴れしく話す、やや年上の女にとりあえず俺は、石化が解けた後に言った。

『帰れ』

『家ない。現在所持金、二十七円！』

五枚の硬貨を見せて、なぜかそいつは妙に誇らしげだった。

『昨日、ついに借金のかたで家を売っぱらっちゃってね。本当は五百二十七円あったんだけど、銭湯とコインランドリーで、あつという間に二ケタ！ 野宿は平気だけどこれでも一応女だから、体と服は綺麗にしときたくってね』

野宿したら結局汚れて意味がねーし、第一危ないだろ……という常識的なつつこみも出てこなかった。

何、こいつ？ マジ話？ ふざけてるのか？ 俺はからかわれるのか？ 頭がおいしい人？ やばい人？

とにかく、俺はあまりこれ以上関わりたくなかった。

だから財布丸ごと、そいつに渡した。

『……これやるから、出て行け』

中身は確か三万くらい入っていたから、そいつの話が本当だとし  
ても、安いホテルになら二・三日くらい過ごせるはず。

とりあえずこれで追っ払えと、俺は思いこんだ。

顔面に思いつきり、財布を投げ返されるまで。

『ふざけたことしてんじゃねえよ！ 自分で金を稼いだこともねえ  
糞ガキの分際で！ 親がくれたものを、軽々しく他人にやるな？』

いきなり他人に家にやってきて、非常識この上ないことを言い出  
した奴に、説教された。

『金はな、自分で稼がなくっちゃもらえないものなんだよ！ ただ  
欲しいだけなら初めからそういうわ！ 私は、金がただ単に欲しい  
んじゃないかって、雇って欲しいんだよ？』

無茶苦茶な奴のくせに、正論を言うし。

もはやこいつがおかしいのか、実が俺の方がおかしいのか、この  
時すでにわからなくなっていた。

わかった事は、二つだけ。

春日あずま<sup>はるひ</sup>って奴は、確実にアホで変人だけど、悪い奴ではない  
事。

それから……

『親がくれたものを、軽々しく他人にやるな？』  
その言葉は、とても正しいという事。

## 日常

「……春日坊ちゃん<sup>かすが</sup>。まだ、学校にメイド服で弁当を届けたこと、怒ってるんすか？」

「　　当り前だろうが！　あの後、メイドフェチだとか何とか、どんだけ言われたと思ってるんだ！　お前が『メイドと言ったら、これっしょー！』とか言っつて、勝手に着てるだけだっつて言っても誰も信じねーし！」

「それは失礼っすね。坊ちゃんはメイドフェチじゃなくて、セーラー服フェチなんすから！」

お宝だつて、女子校生ものオンリーですし」

「どこをフォローしてるんだよ！　つーか、何で知ってる！？」

死にたい！　今すぐこの家を爆発させて、全てを木っ端みじんにして死にたい！

もしくはこの場で穴掘つて、その中に埋まりたい！　ここリビングだけど！

頭抱えてうなだれる俺の肩に、あずまはポンつと手を置いて言った。

「坊ちゃん。私はメイドっすよ？　洗濯機の脇って隠し場所はなかなか斬新でしたけど、そりゃばれますよ。素直に自分の机の中が、一番の安全地帯っすよ」

「うるせー！！」

「とりあえずお宝は、坊ちゃんの筆笥の上から二段目の奥底に移しておきました。そっちの方が発見しにくいから」

「余計な気遣いをするなー！」

雇い主を本気で怒らせておきながら、あずまはへらへらと面白そうに笑っていやがる。

「いやー、すみません。でも、話を戻して言ってみますと、この格好で出歩くなと言われましても私、これ以外の服は持ってませんし」

ピラリと裾を持ち上げて、またこいつはふざけた性格のくせにそれなりに筋道が通った事を言い出しやがる。

そうだ。こいつの服は、同じデザイン五着を着まわしてるんだっ  
た。

「買えばいいだけだろ、買えば！ 私服の一着や二着くらい持て！」

俺はつい、言ってしまう。答えなんて、わかりきっている事を。

「金ないから無理。給料全部、返済に充ててるし」

あずまはいつものように、ケロリとノー天気と言った。

同情なんて求めていない、誰にもさせないくらい、あっさりと。

こいつが出会って初めに言ったことは、すべて事実だった。

借金返済の為に家売って帰る場所がなかったのも、所持金どころか全財産が二十七円だったことも。

あずまも、両親を事故で亡くしたらしい。

俺と違うところは、あずまに残された遺産は数十万の金と、あまり価値があるとは言えない家と土地。そして、一千万弱の借金。

あずまの家は小さな下請けの工場をやっていたらしく、ここ最近の不景気で抱えた借金らしい。

返せる充てがあつたからか、娘に心配をかけたくなかつたからか、あずまの両親はあずまに借金のことを何も話してなかつたらしく、当時、卒業間際の高校3年のあずまは途方に暮れたそうだ。

ただでさえ突然両親が亡くなつたら、悲しいとか感情面だけでも大変なのに、あずまは両親以外に親戚がおらず、天涯孤独。

葬式に、財産、工場のこと……、十八歳のあずま一人で出来ることなんて、たかが知れてる。

唯一の幸いは当時の担任は面倒見が良くて、弁護士やら何やらを紹介したり、財産関係を整理してくれたり、少なくとも卒業はできるように奔走してくれたらしい。

担任が苦勞してくれたおかげで、あずまは無事卒業できたが、両親



親が死ぬ前までは大学進学予定だったのでもろくなく就活ができず、就職が決まらないまま卒業してしまった。

そして、あずまは相続放棄できた借金を放棄しなかった。

『私を育てて、大学まで行かせてくれようとして親がした借金ですから、私が人生掛けて返すべきでしょう？』

何故、相続放棄しなかったを訪ねた時、あいつが言った言葉。

そう言い切ったあずまは、文句なしに格好良かった。

いや、こいつはいろんな意味でやたらといつでも格好良い。

卒業して、もう頼れる担任はいないのに家をいきなり売ったのも、借金の取り立てでフーズクかエンコーでもして稼げと言われたのに、腹が立ったかららしい。

古くて小さくてそこしか帰る場所はないのに、両親との思い出が詰まった家なのに、どうしたら少しでも高く吊り上げることができるかなんてわからなかったけど、とりあえずそれで、半分近くの借金が返せるから。

正攻法で返済して見せる姿勢を見せて目玉をひんむかせてやった、とあずまは胸を張って語った。

あまりにも後先を考えていない大バカだけど、本当にこいつは正しくて、惚れてしまいそうなくらい、格好良い。

惚れるって言っても恋愛感情じゃなくて、何っ？か……「兄貴と呼んでください！！」的な意味で。……姉御ですらねーのかよ。

こいつは何で、見た目は清楚なお嬢系美人なのに、中身はこんなにもどうしようもなく体育会系なんだ？

「……じゃあせめて、ヘッドドレスとエプロンを外出する時は外して行け。そうすればただの黒いワンピースだ」

俺がため息をついてそう言っと、切れるところは全て切っている借金持ち体育会系メイドは、俺よりも盛大なため息をついた。

「坊ちゃん。そこは『俺が一着くらい買ってやる』って言うところ

でしょう？」

ちつちつと指を振ってあずまは指南するが、何故そんなラブコメ展開なセリフを俺が吐かなくちゃいけないんだよ？

「もう黙れ！　つーか仕事しやがれ！」

「ざあゝんねん！　掃除・洗濯・買い物・夕飯の下ごしらえは、とつくの紀元前に済ませました！　だから坊ちゃんて遊びます！」

「俺」と『だろ！　俺』で『遊ぶんかい！？』

しかし、雇い主を友達か何かかと思っっているような態度以外、本当にメイドとして完璧な奴だな。

あずまは思っていた以上に変な奴だけど、思っていたほどバカではなかった。

借金返済のための仕事に何で住み込みのメイドなんていう、ギャルゲーみたいなことをやらかそうとしたのかも、根本の発想がおかしすぎるが、筋は通ってたりする。

家事が得意だからっていうのも、もちろん理由の大きな一つだが、あずまにとって「住み込み」というのが最重要条件だった。

家がない、金がない、借金があるあずまは、住み込みの仕事なら家賃どころか光熱費なども浮くし、食費だつて必要ないと思っただけいい。

つまり、本来なら切れない生活費さえも全部切り落とし、給料を丸ごと全部返済に充てるという、究極的にバカげていて、一周回ってむしろ天才なんじゃね？　なことを考えて、しかも実行しやがった。

コネも紹介もなく、高級住宅街の家を一軒一軒、あずまは回ってあの頭の中身を疑うようなセリフを吐いたんだ。

『ちわー。メイドいかがですかー？』

何度、門前払いをくらっても、何かやばい変質者と思われるでも、蔑みの眼で見られても、家売って、背水の陣であるあずまは、諦めずに、同じノリで、あのアホなセリフを言い続けたんだろう。

そう思うと、俺自身はどれだけ、恵まれた立場かがわかる。

そして、自分がこの世で一番不幸だと思いこんで、引き籠っていたあの頃が恥ずかしい。

あずまと比べたら、俺が悲劇の主人公なんて片腹痛い。俺はただ、自分の立場に酔っていただけの痛いガキだ。

……けれどあずまは、俺を責めたり、羨ましがったりしない。

説教は一度だけ。まだ、雇う前。とりあえず追っ払おうとして、財布ごと金を渡した、あの時だけだ。

……あの説教で悪い奴ではないことがわかって、少しだけ興味を持った。

だから、家に入れて事情を聞いた。

境遇に同情して、様子見にと二・三日、仕事をさせてみた。

そしたら完璧だったから、本格的に雇うことにした。

あずまを雇った理由なんて、これくらいのつもりだった。

でも、本当は家事が上手いとかは関係なかったのかもしれない。

俺はあずまのうつとおしいと思うことすらすっ飛ばす、ノー天気  
で、馴れ馴れしくて、格好良いところに、ただ単純に、憧れただけ  
なのかもしれない。

悲劇ぶるにも値しない、小さくて格好悪い俺だけど、……この家  
に独りきりでいるのは、……淋しいのがただ、嫌だったからなのか  
もしれない。

「どーしたんすか？ 急にブルーになってませんか？」

あずまは死にかけの病人を見るような、お前の方が死ぬんじゃない  
？ とでも言いたくなるぐらい心配そうな顔をして俺の顔を覗き  
込む。

普段はマジ、雇い主って何？ なノリと態度なのに、他人なんか  
気にかけていられない境遇のくせに……、この超絶お人好しは反則  
だろ？

例えば、俺が風邪を引いている時。

例えば、両親の誕生日や命日で、俺が落ち込んでいる時……

そんなときにそんな顔されたら、泣いてしまいそうだろう？俺よりもずっとひどい境遇のお前に心配かけて、何もできない俺自身に対する悔しさ……、心配してくれる人がいる嬉しさで……「何でもねえよ。それより、小腹がすいた。なんかねえ？」

「昨日作ったクッキーが確かまだ残ってたはずですよ」

俺がいつもの調子で言うのと、あずまはホッとしたように笑って、スカートを翻し、クッキーを取りに行った。

ふわりと優雅になんかじゃなくて、ブワツと派手にパンツが見えそうなくらい、急ぐ必要もないのに、どたどたと騒がしく。

……体育会系と言うか、あれはガサツなだけだな。メイド服が似合ってるだけに、何か妙にもの悲しいものを感じる。

## 麗らかな終わり

紅茶のポットを高々と右手で掲げて、腹くらいの位置に持ったティーカップに、あずまは茶を入れた。誰も曲芸をしろとは言っていない。えよ。

「……あずま、お前妙にテンション高くな？」

「はい？ 私、テンション低かった時なんて、ありました？」

ない。こいつは寝てても寝言のテンションが高い。

三日前、ソファで居眠りしてた時の夢、一体どんな内容だったんだ？ ジャガイモが進化して、嫌気性細菌になって、ジヨセフィ―ヌ子爵にプロポーズとか叫んでたんだが……

「何か今日はいつもに増してノリノリというか、無駄に騒がしいというか、……とにかくいつもよりうつとおしい」

見ていて飽きないのはいいんだが、確実に色んなとばっちりを俺は食らうからな。せめて何か被害をくらう前に、理由くらい知っておきたい。

「あれ？ そーですか？ まあ、明日のことを考えたら、テンションだつてそりゃあ上がりますよ？」

「明日？ 明日って……」

ああ、そうか。明日はこいつの……

「給料日つすよー！ 私の！ 坊ちゃん、忘れないで下さいよー！ なんだつて、明日の給料で私の借金は、晴れて全額返済？」

万歳三唱しながら飛び上がって大喜びするあずまが、俺には気にならなかった。

いや、気にする余裕もなかった……

初めからわかりきっていることだが、俺とあずまは知り合いでも血縁者でもなく、ただの雇い主と従業員だ。それ以上もそれ以下も、それ以外もない。

ただ、それしかないない。

あずまの借金が減ろうが無くなるうが、別に喜ぶことじゃない。  
ましてや、ちょっと嫌だと思うことなんて、人として論外なのに

……

あずまが住み込みでメイドという、ギャルゲーそのもののような  
ことをしているのは、給料全部を返済に充てるためであって、別に  
好きでやってる訳じゃないんだ。

きつと、こんな生活は嫌だろう。さつさと借金返済して、自由に  
なりたいたいはずだ。

あずまは確か今年で二十歳だ。本来なら学生にしろ社会人にしろ、  
最後の青春を謳歌しているはずで、決して家事に追われていい歳じ  
やない。

……きつと、きつとあずまは借金を全部返済したら、ここを辞め  
る。

給料はそれなりに良いつもりだけど、自由になる時間はほとんど  
ない、大変なだけで張り合いのない 家事なんて、メイドなんて仕  
事よりもずっと楽で楽しい仕事はあるだろう。

「おめでとう」

自分が出そうと思ってた声とは違い、すねてるみたいな冷たい声  
が出た。

すねてるみたいじゃない。

すねてるんだ。恥ずかしいくらい、ガキっぽく。

怒ってるんだ。どうしようもなく、理不尽に。

「坊ちゃん、どうしたんすか？ ブルーから戻ったと思えば、今度  
はすねちゃって」

心底不思議そうな顔をして、仔リスのように首をかしげるあずま  
が無性に腹立った。

「すねてねえよ！ 何ですねなきやならないんだ？」

逆ギレしておいて、すぐに自己嫌悪する俺。

すねてるだろーが。思いつきり。

嫌なんだろう？ あずまがいなくなるのが。

淋しいんだろう？ あずまがいなくなってしまうたら。

……この約一年間、良くも悪くもあずまがいて淋しくなかった。  
もしかしたら、仕事ばかりだった両親が生きていたころよりも  
ずっと

あずまは、うるさくて、騒がしくて、うつとおしくて、明るく  
て、面白くって、優しくて、いい奴だから。

「はいはい。坊ちゃん、苛々は体に悪いっすよー。カルシウムたっ  
ぷりのロイヤルミルクティーでも飲みますか？」

ほら、今だって俺の逆ギレに、怒りもしなければ謝りもしない。  
気にした様子もなく、けらけら笑うのはマジで男前。

「……あずま。坊ちゃんはやめろって、何回も言ってるだろ」

自分の器の小ささとガキっぽさが嫌で、恥ずかしくて、目を合  
わせずに俺は話を変える。

「前々から思ってたんですけど、何で坊ちゃんは、坊ちゃんって呼ば  
れるのがそんなにも嫌なんすか？ 旦那様も嫌がったし、ご主人様  
って言ったらマジギレしたじゃないっすか」

「当たり前だ！ ここはメイド喫茶か！？ 普通に春日<sup>かすが</sup>って呼べば  
いいだろうが！」

「さすがにそんな。友達みたいな呼び方できませんよ」  
あずまは、きっぱりと言った。

どんなにあずまは馴れ馴れしくとも、どんなに俺達は親しくても、  
結局はやっぱり「坊ちゃん」と「メイド」なんだ……

わかってる。

わかってるよ、あずま。

でも、嫌なんだ。

別に恋人になりたいとか、そういう訳ではないんだ。

ただ、金とか契約とかそういう冷たい繋がりだけじゃなくって、  
小指の先くらいでいいから、他の繋がりが欲しいんだ。

……お前が辞めてしまった後、ほんの時々でも連絡が取れる繋がり  
が欲しいんだ。

そう言いたいのに、口から出るのは可愛げのない糞ガキの言葉。

「……坊ちゃんなんて、格好悪いだろう」

恰好悪いのは、素直になれない俺自身だろうが。

大バカ野郎。

その夜、夢を見た。

『へえ、春日<sup>かすが</sup>っていうんすか』

雑な敬語（？）で、気持ちよくカラツと笑って話すあずま。

自己紹介をした時だ。

「字が一緒すね。私は姓の方ですけど。春生まれだからっすか？」

俺の名前と、あずまの姓が一緒。

ただそれだけのことを、とても嬉しそうに、おかしそうに笑って  
た。

だから俺も、つられて笑った。

『もし俺がお前に婿入りしたら、すげーややこしいな』

くだらない冗談に、あずまは腹を抱えて笑った。

『春日<sup>はるひ</sup>春日<sup>かすが</sup>！ うわっ、最っ高じゃないっすか！ 結婚しちゃいま

しょーよ？』

『するかボケ！』

こんなバカなやり取りを、一年前、麗らかな日にした。

俺達は、出会いの季節に出会ったんだ。

『うあゝ、即答で振られた〜！ けど、就職まで振らないでくださ  
いね！』

東京タワーより高いテンションであずまは言って、手を差し出し  
た。

ほんの少し、照れ臭かった。

けど俺は、その手を握った……つもりだった。



桜が散るように、あずまの姿が崩れて、影も形もなくなった。  
そうなることが、初めから決まっていたみたいに。  
儚く、淡泊に、何も残さずに。

……今更、嘆くなよ。悲しむなよ。

春は出会いだけじゃなくて、別れの季節だってことを、俺は知っていたはずだ。

父さんと母さんが死んだのは、あずまと出会う一週間前の…、桜がすごく綺麗な日だったじゃないか。

朝、目覚ましが鳴る前に起きた。

きつと、暑かったから、寝苦しかったんだ。

夢のせいなんかじゃない。

枕が湿ってるのは、汗だ。

涙な訳がない。

……悲しくなんて、ない。

## 別れの季節

その日、学校から帰るのが、いつもより一時間遅れた。

帰りに銀行に寄って、あずまの給料を引き出そうとしたら、暗証番号がどうしても思い出せなくて、一時間もかかった。

こんなこと、今まで一度もなかったのに……

「ただいま」

「坊ちゃん、お帰りなさいーい！」

淑やかさも優雅さもない、スーパージョントナ出迎え。

やかましいくらいに足音を立てて、尻尾があればちぎれんばかりに振ってるくらい嬉しそうにあずまは駆け寄る。

八つ当たりしたくなるくらい、いつも通り。

何故かその手には今日、俺が家に忘れていった携帯電話を握り締めているのだけが、いつもと違うところ。

「坊ちゃん、昨日は弁当、今日はケータイを忘れるなんて珍しいっすね。おまけに帰ってくるのもいつもより遅かったですし。」

「ああ、ちよつとな……」

暗証番号を思い出すのに一時間かかったなんて言えん。言ったらこいつは絶対、人の気持ちも知らないで、腹抱えて笑う。

「おかげで連絡ができませんでしたよ」

「連絡？ 何のだ？」

ケータイを受け取って俺が尋ねると、あずまの返事より先に声がかかった。

「春日君。やっと帰って来たのね。」

いきなり、冷水でもぶっかけられた気分になった。

厳しくて、何も後ろ暗いことなんてしてないのに、何だか怒られるのではないかと不安になる、そういう相手の声……

「叔母さん……」

相変わらずその人は、何十年前に出てくるテンプレスパルタ女鬼

教師だよ？　って格好。

スーツも眼鏡もきつちりまとめた髪も似合うというか、ハマりすぎてるといっか……。

背筋も定規でも入ってるのかと思うくらいビシッと真っ直ぐだから、大して背は高くないはずなのに、やたらと大きく見える。まあ、それは俺の苦手意識のせいもあるのだろうけど。

「まったく。携帯電話も持たずにいつまでウロウロしているの？」

話があるから、早く来なさい」

叔母はそう言って、踵を返してリビングに向かう。

ここは俺の家であって、あんたの家じゃないはずですけど……

「……叔母さん。今日来るって連絡しました？」

「何？　何か言った？　いいから、早く来なさい」

俺が言うことをきかないからか、一時間待たされたからか、眉間にしわを寄せて言い放つ。

この人はいつもこうだ。自分が一番正しいと思って、人の都合を考えない。

実際、いつも正しいからこそタチが悪い。

この人は正しいだけであって、そこに優しさや気遣いはない。

「……まったく。何しに来たんだか？」

悪いなあずま。なんか、厭味でも言われたか？」

叔母はあずまを嫌ってる。

叔母からしたら、借金を持つてる時点であずまは、後先を考えない無計画な人間であり、軽蔑の対象なんだ。

他にも、あの雑な敬語とか馴れ馴れしい態度とか、挙げていけばきりがない。

「いやいや。なんか、私とは話すのも嫌らしくって、坊ちゃんがいっつ帰ってくるかってのを訊かれたのと、コーヒー入れてと言われたくらいですよ」

あずまは俺から、上着と鞆を受け取って言う。普通なら、ムカついてしょうがないであろう叔母の態度を、まったく気にせず笑って

言う。

叔母にとってこのへらへらした笑顔が一番、気に障るものなんだろう。

俺にとつては、尊敬に値するくらい格好良いと思えるものなのに。「坊ちゃん。気を使ってくれて、ありがとうございます。けど、これも仕事のうちだし、何ともないですよ」

……叔母よりずっと、あずまの方が大人だ。

本当、悔しいけれどこいつは、めちゃくちゃ格好良い奴だ。

あずまに冷たい飲み物を頼んで、俺はリビングに行く。

叔母は、苛々と指でテーブルを叩きながら待っていた。

どんなにこの人が正しくても、俺はこの人に懂れない。むしろ、どうしてこんな奴が正しいのだろうと思う。

「何の用ですか、叔母さん？」

「二週間後から、私もここに住むから」

………は？

何言ってるの、この人？

言ってることはあずまの第一声より、当たり前だがずっとまともだけど、受けた衝撃は正直言って同レベル。

「だから、部屋をどこか空けておいて欲しいの。後、あの春日<sup>はるひ</sup>つて子も、解雇しておいて。」

！？

「ちよつと待ってくれよ！ 訳わかんねえ！ 一から説明してくれよ？」

何でいきなりここに住むとか言ってるの？ それに何で、あずまを辞めさせなくちゃならないんだよ！？」

いつも俺に相談なしで身勝手に何でも決める人だけど、今日のは本気で全然意味がわからない。

それに……、別にわざわざ解雇なんてしなくても、あずまは……

「今までは仕事で日本にいないことが多かったけど、これからあまり飛び回る必要がなくなってきたからよ。前々からもう高校生とはいえ、独り暮らしはあまり賛成してなかったでしょう？」

叔母は、いつまでも九九を全部言えない子供を見るような、うんざりとした顔で俺を見て続ける。

「春日君はしつかりしてるとはいえまだ子供だし、世間知らずな所があるから、保護者と一緒にいた方がいいわ」

きっぱりとした断定。反論なんて予想してないし、許してない。

「……まあ、それはいいとして……」

全然、いいところなんて俺からしたら何一つとしてないが、ここは妥協しておこう。

問題は、その次の要求だ！

「何でそこに、あずまの解雇が入ってくるんだよ？ 海外を飛び回らなくて済むったって、叔母さんが忙しいことは変わらないんだろ？ なら、いた方がいいはずだ」

あずまの名を出すと、叔母は不愉快そうに鼻を鳴らした。

「あんな子、別に必要ないでしょ？ もっとちゃんとした清掃会社から、ハウスキーパーを派遣してもらえば済むだけよ」

「理由になつてねえよ？」

勢いで怒鳴りつけると、叔母は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をした。

初めて見たそんな表情に、胸のどこかが結構スツとした。

けど、怒りが治まった訳じゃない。

「あずまを辞めさせた後、どうするかなんて聞いてない！ 結局他の奴を雇うのなら、今のままで十分だ！ あずまの仕事は完璧なんだから？」

「……完璧？ 確かに掃除とか料理とかは認めるけど、態度は最低じゃない。雇い主を対等だと勘違いしているは、いちいち動作が騒がしくつてうるさいは、……第一、住み込みっていうのが大問題よ」

……大問題？ あいつにとって、大前提だった労働条件が？

「年頃で赤の他人の男女が一緒に住んで、世間にどう思われるかぐらいわからない？ まったく……、そのうち気付いてくれると思つて様子を見ていたのに、丸々一年も雇うなんて……」

「べ、別に俺とあずまは何でもない！ 俺はあずまのこと、女と意識してないし？」

女どころか兄貴だと思つていることはさすがに言わないでおこう。  
「あなたたち本人なんて、関係ないわ。重要なのは、世間がどう思つているかよ」

叔母は言い切つた。

これだけは、正しいとは思えない。

正しいなんて、許さない！

「……関係ない。世間や近所に俺達が恋人同士と思われようが、俺がメイドフェチと思われようが別に犯罪じゃないんだ！ 俺たち本人が恥ずかしかったり、困ったりするだけだ！ 問題なんかない！それに、叔母さんは知つてるだろ？ あいつには家もなければ頼れる親戚もいないんだ！ やめさせた後にもしものことがあつたらそっちの方が世間からの評判も悪くなるだろ？」

あずまが自分の意思でここを去るのは、仕方ないことだ。

でも、こんな奴の都合で、ただ氣にくわないから辞めさせたいつてだけのくせして、偉そうに、正しいフリして辞めさせられるのは、……奪われるのだけは嫌だ？

「知つてるわ。けどもうほとんどないんでしょ？ まとまつた退職金さえ出せば、なんとでもなるわ」

「だからって……」

まだ足掻く俺にキレて、叔母はテーブルを強く叩いて怒鳴りつけた。

「いい加減、わがままはやめなさい？

一年前、姉さんと義兄さんが死んだのはあなたがあんなわがままを言ったことが原因だってことを、忘れたの！？」

『ごめんなさい、春日<sup>かすが</sup>。入学式に行けなくて』

電話で、母さんは謝った。

『来週までには帰るから』

父さんは、約束してくれた。

花見に行こう。

その約束が、永遠に果たされないことが決まったのは、約束を交わした二日後……

## 宣言

「春日君にとつては、ちょっとしたわがままのつもりだったかもし  
れないけど、こつちにとつては大迷惑だったことを少しはわかつて  
欲しいわ。」

姉さんと義兄さんは、休みを取る為にどれだけスケジュールを調  
節したかわかつてる？ そのあげく、タクシーが事故に遭うなんて

……」

叔母の深い溜め息は、身内を亡くしたことを思い出して悲しいか  
らじゃない。

俺に苛ついて、腹を立てているだけだ。

……言いたいことは、山以上にある。

入学式に誰も来てないみじめさを、あんたは知ってるのか？

式が終わって、一人で帰るのがどれだけ淋しいか、味わったこと  
があるのか？

父さんと母さんがどんなに大変な思いをしてくれたかは、少しは  
わかっているつもりだ。

でも、……たまにはいいじゃないか。たまには、わがままくらい  
言ったって。

俺は俺なりに、ずっと独りの寂しさを我慢し続けてきたんだから。  
けど、言えない。

俺がわがままを言わなければ

花見がしたいなんて、言わなければ

少しでも早く、帰ってきてほしいと思わなければ

父さんと母さんは、少しでも早く帰ろうとはしなかった。

あの事故が起こる日に、その時間に、そのタクシーに乗らなかつ  
たのに……

「ただでさえ仕事は目眩がしそうなくらい残ってたのに、葬式や  
ら遺産配分やらで私も過労で死ぬかと思ってたわ。」



だから春日君。これ以上わがままは……」

「おっとすみませーん」

ドバツと、叔母の頭上でグラスが真っ逆さまに。中に入っていたオレンジジュースはもちろん、叔母が頭から被った。

「! ? ? ! …… なっ ? 」

「あ……、あずま! 何してるんだよ! ? 」

いつからいたのか、あずまはいきなり叔母に思いつきりわざと、勇ましいくらいふてぶてしい態度でジュースをぶっつけた。

「すみません、坊ちゃん。ジュースを台無しにしまいました。今、入れ直します」

あずまはいつものへらへらとした笑いではなく、にっこり完璧な笑顔で軽やかに言った。

完璧だからこそ、その笑顔は嘘だとわかる。

「な……何するのよ! い、いえ、何を考えてるの! ? 態度が悪いのは知ってたけど、客にこんなことするなんて……」

「どちらさんがお客なんすか? 」

叔母に振り返った言ったあずまの眼は、叔母を完全にバカにしきつた眼をしていた。

「お客様っていうのは、こちらが招いて来ていただいた方が、歓迎されている方のことですよ? 何の連絡もなくいきなり勝手に来た人は、少なくとも私の辞書では、客じゃありませんね」

腰に手をやって、堂々とあずまは言い切る。

反省一切なし。初めの謝罪も、叔母にではなく俺にジュースを台無しにしたことに対してだな。

「か、勝手につて、失礼ね! ここは……」

「春日坊ちゃんのご自宅です。あなたではありません」

叔母に会話の主導権を渡さないあずま。

頼もしい。ものすごく頼もしいが……、怖い! 女の戦いって、マジで怖えっ?

がちんこの殴り合いじゃなくって精神を削る揚げ足取りバトルだから、空気の重さが半端じゃない！　ここだけ重力が違う！

オレンジジューズをぼたぼたと垂らしてる叔母さんの顔が、どんな怒りで赤くなってる……

当事者ですけど、俺、逃げていいですか？

「あなたは自分が雇われの立場だつてことを、自覚してるの！？　借金を抱えてる社会的弱者が、偉そうな口利かないで！」

叔母は、相続放棄できた借金を責任持つて返済している、強いあずまを見下した。

……やばい。本気で今、殺意がわいた。

「わかってますよ。私は、坊ちゃんの厚意で生かされてるってことくらい。」

だからこそ、私はあなたを許さない」

熱くなる叔母とは逆に、普段のあずまからは想像もできないくらい静かに冷たく、彼女は言う。

眼だけは一年前、初めて出会った時の説教した時と、まったく同じだったけど。

「許さない？　それはこっちのセリフよ！

訳のわからないことを言ってるで、早くタオルでも持つて来なさい！！」

ジューズまみれの叔母が怒鳴りつけて命令しても、あずまは直立不動のまま。

「何してるの！？　聞こえないの！？　……その態度は何？　解雇されるからって八つ当たりしてるの？

あんたのその態度が原因でクビになるってことをわかってる！？」

勝手にあずまの性格を作るな。

こいつは八つ当たりなんていうしょうもないことをするような、格好悪い奴じゃない。あんたと一緒にするな。

あんたなんかよりも、あずまはずっとずっと格好良いんだ。

「……坊ちゃん」

あずまは、叔母のことなんか完全無視して俺に尋ねた。

「タオル、いりますか？」

さっきの嘘丸出しの完全無欠な笑顔とは違う、へらへらして、力  
ラツとした、気持ちのいい笑顔で。

「……何で春日君に訊いてるの？ ……春日さん。あなたは耳と頭、  
どっちが悪いの？」

「私は雇われの身。借金持ちの社会的弱者ですから」

また激烈に嘘臭い笑顔で、こいつは何故か叔母の言ったことを全  
面肯定しだした。

「だから、坊ちゃんには頭が上がらないですよ。それから……、  
私を雇っているのは坊ちゃんですし、私はあなたから借金をしてい  
る訳じゃない。あなたの言うことをきく義務もなければ、弱みもな  
い」

ひどく冷たい笑みを叔母に投げつけて、あずまは俺に歩み寄る。

「私の雇い主は、春日坊ちゃんお一人。私に何をさせるか、辞めさ  
せるかを判断していただくのは、坊ちゃん。私が命令をきくのは、  
坊ちゃんだけです」

俺の前に立ち、あずまは慇懃に、優雅に頭を下げた。

叔母の言った、対等だと勘違いしている態度なんかじゃない。雇  
われどころかこれは、中世の騎士が王にでも捧げるような礼儀と忠  
誠を持った礼。

「坊ちゃん。勝手な真似をして、ソファー及びじゅうたんを汚し、  
坊ちゃんのお飲み物を台無しにして、申し訳ありません」

汚したものの中から、叔母は綺麗さっぱり除外された。

「坊ちゃん。ご判断を。」

私は、坊ちゃんの為に何をすればよろしいのでしょうか？」

頭は下げたまま目だけを上げて、あずまは悪戯っぽく笑う。

「何、ふざけたことばっかり言ってるのよ！ いい加減にしなさい？

春日君も少しは諫めなさい！ そんなんだからこの子は調子に乗るのよ？」

いつもならつい萎縮してしまう叔母の声が、今は気にならない。

「……あずま」

「はい。何でしょうか？」

彼女は、ゆっくり頭を上げた。

こいつはどんなに馴れ馴れしくても、自分は雇われた「メイド」だと彼女なりに線引きをしている。

俺達は、「恋人」どころか「友達」ですらないんだ。

「俺の質問に、正直に答えろ。気遣いなんかするな」

「はい」

それは、金とか契約とかだけの冷たい繋がり。

でも、それでも、こいつは………

「両親が死んだのは、俺のせいかな？」

「んな訳ないでしょ」

呆れ丸出しの即答。

あずまは、叔母の言葉と俺が一年間悩み続けた罪悪感を、一秒足らずで否定した。

「……俺は、両親の仕事が忙しいのも、大変なのも知ってたのに、……わがママを言ったのに、……そのせいで」

「仕事が忙しくて大変なのは、たいていどこも一緒に当たり前のことですよ。そんなもんには子供がいちいち気を使っていたら、それこそ何も言えないしできませんってば」

サラサラと、俺の悩みを「アホか」と言わんばかりに、あずまは答えていく。

……こいつと俺を繋ぐものは、とても冷たいもの。

でも、あずま自身は……

「親相手にわがままなんて、いくらでも言っていいいですよ。そのわがままに答えるかどうかは親次第ですし、あまりに度が過ぎたも

のなら、叱るのが親の仕事ですしね。

親の義務は子供を幸せにしてやることなんですから、そのために忙しく働いて、家に帰れなくて、そのせいで子供が淋しくて、不幸って本末転倒起こしてるんなら……」

くしゃりと、子供をあやすようにあずまは、俺の頭を柔らかく撫でた。

「いつくだけでもわがまま、言っていていいですよ」

叔母とは正反対のことを、きっぱりと言い切りやがった。

格好良く、優しく、カラッと、暖かく……

冷たい繋がりがりしかないのに、ただの「メイド」と「坊ちゃん」でしかないのに、叔母の言うことをただ大人しく従っておけば楽なのに……

なのにあずまは、俺の為に怒ってくれた。

自分のことは仕事だからと笑って流せるくせに、あずまは俺の為に怒り、俺の為に叔母を許さない。

「あずま、叔母さんにタオルを」

俺が眼を伏せて指示を出すと、叔母は不満たらたらな顔で、「やっつと?」と言う。

その顔をまっすぐに見すえ、俺は言う。

山以上に言いたかったことの中から、一番に言いたいこと、言うべきことを。

「叔母さん。タオルで体を拭いたら帰ってください」

「……はあ?」

叔母の顔がハトが豆鉄砲どころか、グレネートランチャーをくらったような顔になった。我ながら、意味のわからん表現だな。

「俺は叔母さんとは暮らしません。あずまも辞めさせません。これ以上、いくら話しても俺は折れませんから、時間の無駄です。

だから、帰ってください」

「なっ……! かすが春日君! あなたは誰にどういうことを言ってるのか、わかってるの!?

姉さんと義兄さんが死んでから、あなたの面倒をみたのは……」

「あずまです」

これは絶対に、揺るがないこと。

「この家の家事をしてくれたのは、あずまです。俺の失敗をフォロ―してくれたのも、あずまです。俺が風邪をひいたとき、付きつきりで見てくれたのだってあずまです」

春に騒がしく出会い、夏は海や祭りに俺を連れまわし、秋はスポーツやら食欲の秋とうるさく巻き込んで、冬はクリスマスや正月の用意に忙しく、俺の為に働いてくれた。

たったの一年しか、俺達は過ごしていない。

けど、両親よりもあずまはずっとそばに、ずっと一緒にいてくれた……

「おばさんには、父さん母さんの葬式の用意や財産のこと、会社のことでお世話になったのは知っていますし感謝もします。」

でも、俺にとっていなくて困るのはあずまなんです。一緒にいて欲しいのは、あずまなんです」

叔母がしてくれた方が、世間的には大変で重要なことだとは思いますが、金がなくても多くを望まなければ何とでもなることを、そのまんま体現しているあずまを見ると、酷い話だが、感謝はしてもあまり恩は感じない。

両親が死んでから、今まで俺が生きてこれたのは間違いなく、叔母さんではなくあずまのおかげ。

あいつが俺を、決して独りにはさせなかったから。

淋しいとか悲しいとか思わせる暇なく、毎日が騒がしかったから。友達じゃないし、冷たい繋がりがりしかないけれど、そんな冷たい繋がりででも伝わるくらい、あずまはとても、暖かな奴だから……

「だから、叔母さんの指示には従えません。恩知らずなわがままで結構ですし、縁を切ってもらっても構いません」

……あずま。お前がいって言ったんだから、遠慮なく言わせてもらっぞ。

「俺はあずまと一緒に暮らします」

「……何かそれってプロポーズみたいすね」

いつの間にか、あずまはタオルを持ってきて言った。

っていうか、こいつはいつたいいつ出て行って、いつの間に戻ってきたんだ！？

そして確かに、今のセリフは事情を知ってる奴でもプロポーズに聞こえる？

恥ずい！ 恥ずかしすぎる？

一キロくらい深く穴掘って、埋まっちゃいたい！ そのまま化石になりてー！

「坊ちゃん、顔が赤いですよ」

うるせー！！

ニヤニヤ笑いながら、あずまは叔母にタオルを恭しく渡す。

「どうぞ。体をおふきしたら、玄関までご案内します。『お客様』」

その後、もうしばらく女の戦いが続いたけど、俺は自分が言ったことの恥ずかしさで自己嫌悪のドツボに陥って、それどころじゃなかった。

## 春の日向は続く

「……あずま、ほら」

「何ですか、それ？」

俺が差し出した封筒を手にとらず、まずは訊いた。

「昨日、あれほど楽しみにした給料だろうが。いらないのなら、別にいいけどな」

「ああ？　いります！　めっちゃいります！

……つか、今日は渡すの早くないですか？　いつもは夕飯の後に渡すのに」

空気バリ重な女の戦いは、叔母が「もう二度と来ない！」とキレて帰った事で何とか終わり、その後すぐに俺は、あずまに給料を渡した。

……渡そうって思った時に渡さないと、たぶん渡せなくなるから。「別にいいだろ」

もちろん俺にそんなことを素直に言える可愛げなんかない。このセリフさえも、そっぽ向いて言う。

「それでさつさと借金返済して来い。今日で全額なんだろう？」

「ええ。今日の給料全部で、ジャスト借金全額完全返済って、あれ？……坊ちゃん？」

きょとんと眼を丸くして、ずいぶん可愛らしい顔であずまは訊いた。

「……五万くらい、多いんですけど……」

「ボーナスだ」

せめてもの、別れの手向けに。

あずまは「わがママを言ってもいい」と言ってくれたけど、でもやっぱり、言っていないわがママとダメなわがママはある。特に、あずまは俺の身内じゃなくて他人だし。

……借金がなくなっても、ずっと一緒にいて欲しいとは言えない。



きつと、俺がそう言えばあずまは、ずっといる。こいつは、究極的に人がいいから。

……プロポーズみたいなことを言っておいて、俺達は別れる。仕方ないだろ？　いくらあずま自身が優しく、暖かかったって、俺達の繋がり自体は冷たくて無機質で、拙いものなんだから。

「それで服ぐらい買え。……折角、美人なんだから」  
最後なんだ。せめてこれくらいの素直さは見せよう。

直接顔を見れず、窓に映ったあずまにだけど。

「坊ちゃん」

あずまは深く深く、礼をした。

芝居がかった優雅さはなく、いつもの軽やかさもない。

ただ、真摯さがひたすらに伝わってくる。窓ガラスに映った、鏡像からでも。

「ありがとうございます。」

その言葉に、気が利いた返答は思い浮かばなかった。

「……坊ちゃんはやめろっつーの」

あずまは、淡く笑って出て行った。

借金を返しに。

正真正銘、自由になる為に。

机の上に置かれた、丁寧に畳まれたエプロンとヘッドドレスが妙に淋しい。

……この家は、こんなにも静かだったんだ。

あずまがいらない。それだけでこの家は、違和感の塊だ。

本を読んでいたら、あいつがいつの間にか用意してくれる紅茶と茶菓子を探して手が伸びる。

テレビを見ていると、どの番組でもついついあいつの相槌を求めて話しかける。

音楽を聞いていても、どこか何かが足りない。

一人の時、自分が何をしていたのかわからない。一人でいる事の方が多い暮らしを、ずっとしてきたはずなのに。

この一年の生活が、どうしようもなく染み付いている。

両親が死んだ日を思い出すな。……けど、あの時と違って悲しみはない。

あずまは、生きているから。

……けど、心にあいた穴の大きさはきつと、あの時以上だ。

あずまとはもう、接点がないから。

読んでいたつまらない雑誌を放り投げて、何の気なしの言葉が口から出た。

「俺は、あずまに惚れてたんだな」

異性としてか、人間としてかは、今だにわからない。

けれど俺にとってあいつは、一番重要な人間にいつのまにかなっていたんだ。

「ありがとう。あずま」

俺の為に怒ってくれて。わがままを言ってもいいと言ってくれて。ずっと傍にいてくれて、ありがとう。

もう甘えないよ。家事もやる。朝もちゃんと一人で起きるよ。

もう、一年前みたいに自暴自棄にはならない。

……けどせめて、あと一度くらいでいい。道端でばったり出会って、少し話す。それくらいの繋がりがあることを、願ってみよう。

「ただいま帰りましたー!」

「おう。お帰り」

こんな風に、いつもの調子で帰ってくることまでは、期待しないから………って、ちょっと待てや、コラ。

「!？」

あずまはいた。

いつもの調子で普通に帰ってきてやがったよ、こいつ。

いつもと違うのは、エプロンとヘッドドレスがないことくらい。

「何でお前、帰ってきてんの!？」

思わず全力で突っ込む俺に、あずまの方は心底理解できていない、不思議そうな顔で尋ね返す。

「……は？　だって私、家ありませんし。……え？　私、帰ってきたらダメですか？」

「……………アホだ、俺。」

そうだ、こいつが住み込みしてるのは、家がないからだろうが。

「……いや、……いい。気にするな。……俺の勘違いだ」

顔が急激に熱くなる。

マジ、アホですよ俺。センチメンタルになるには、少なくともあと一月くらい後であるべきだ。

「勘違い？　何を考えてたんすか？」

あずまがエプロンとヘッドドレスをつけ直す。そうかそうか。昨日、俺が言ったとおり外出する時はせめてエプロンとヘッドドレスを取って、メイド服からただの黒ワンピースになっただけかよ。

「……どうでもいいことだろ」

「えー、気になりますって！　何なんですか？　まさか私がこのまま辞めて、帰ってこなくなるって思いこんでたんすか？」

凶星ど真ん中をついてきやがった。

真っ赤になった俺の顔は、モロ正解と言っていたことだろう。

「あ　はっはははははっ？　可愛いー！　アホだー！　ちよっ、最高！　そのボケ、最高過ぎます？」

「うるせー？　腹抱えながらブレイクダンスみたいに暴れながら笑うなー？」

俺のこういう命令は完全に無視して、あずまは酸欠になるまで笑い続けやがった。

「あー、おかし！　いくらなんでも借金返済してすぐ、辞めるわけないでしょ！　マイナスからゼロになっただけで、結局は家もない文なしなんすから」

そりゃそーだ。ボーナスとしてやった五万じゃ一時しのぎくらいにはなるけど、家なしで暮せるわけがない。

……叔母さんが心配する訳だ。俺って、すっげー世間知らず。

「それに私、辞める気なんてないっすよ」

「……え？」

「何すかその顔は？ 辞めて欲しかったんすか？ あんなプロポーズしておいて」

「プロポーズじゃねえー！」

俺の反応に胸を豪快にそらせて笑いながら、あずまは続ける。

「あれ？ 違ったんすか？ まあ、それはいいとして、辞める理由なんて、私にはないっすよ。住み込みはさすがにそのうちやめるでしょうが、ここは給料がいいし家事も好きだから、辞めるつもりなんて皆無ですよ」

太陽のようなカラツとした笑顔と、まっすぐな言葉。

「……別に、俺に気を使わなくていいぞ」

答えはわかってる。あずまは同情なんてしないし、求めない。

「気は遣いますよ。春日君は雇い主なんすから。……でも、使いたくない相手ならとっくの昔に私は辞めますよ」

「……そうか。……ん？」

今、こいつ俺のこと何て呼んだ？

「あずま。今、俺のこと何て呼んだ？」

「え？ 『春日君』ですか？ あまりにも坊ちゃんは嫌がりますし、呼び捨てはさすがにどうかと思いますし、でも苗字やさん付けはなんか変でしょう？ じゃあ、残るはこれしかないかなと思います」

ケロツとした顔でさらりと言う。

……なんか、坊ちゃんの方がはるかに恥ずかしいはずなのに、こっちの方がむずかゆくなるのは何故だ？

別に変わることはない。けど、これからしばらくは変に緊張してしまいそうだ。

……たかが、名前で呼ばれるくらいで。

ただ、これからもずっと傍に、ずっと一緒にいる事で。

「あ、そーだ！ 坊ちゃん……じゃなくて、春日君！ 明日、買い物に行きましょう？ 服を見てください！ 服！」

「服？」

オウム返すと、あずまはニヤニヤ笑う。

なんか非常に嫌な予感がする。

「ボーナスの五万で、服を買って言ったのは春日君ですよ！ なら、春日君かすがが選んでください！」

「げっ！？」

俺の明かに嫌そうな変声を綺麗さっぱり無視して、あずまはさっさと明日の予定を決めて行く。

「楽しみにしてますよ。春日君かすがのセンスを。」

それじゃあ、私は晩飯を作りますんで春日君かすがはセンスを磨いといってください」

「拒否権はねーのかよ！ 俺は雇い主だぞ！」

俺の突っ込みに笑いながら、あずまは台所に逃げる。

「……ったく……」

俺は、頭痛のしてきた頭を抱えて、ため息をついた。

それは妙に、心地良い頭痛だったけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2339j/>

---

春は出会いと別れの日

2010年10月8日12時56分発行